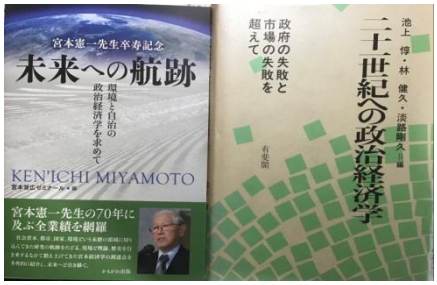
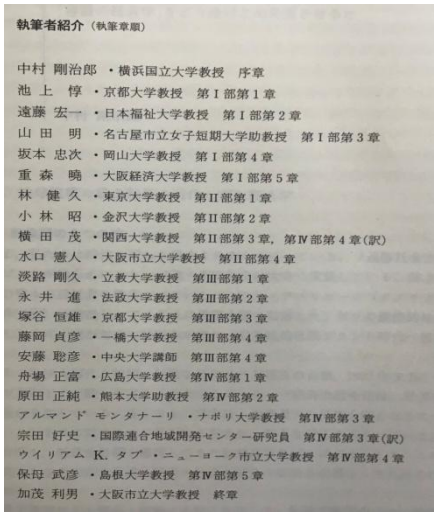
宮本憲一先生「還暦から卒寿へ」

写真左は、8 月に出版された宮本憲一先生卒寿記念『未来への航跡』かもがわ出版。右は宮本先生の還暦を記念して、今から 30 年前 1991 年 1 月に有斐閣から出版された『21 世紀への政治経済学』。久しぶりに手にとった。

編者は池上惇・林健久・淡路剛久という学界を代表する 3 人の先生である。編者はしがきから。「教授は、単に科学者として人類の生存自体を脅かす現在の諸問題の原因を解明されただけではなく、社会に対する責任を果たすために、身を挺して公害裁判の証人席に立たれ、多くの現地を克明に調査して世論を喚起し、法律や判例、行政のあり方にまで大きな影響を与える一方、重要な国際会議を主催されるなど、内外の研究者・市民団体の活動の発展に貢献された。教授は、鋭い問題提起と、孤立を恐れない断固とした行動にもかかわらず、それが広い学識と民主主義思想、文化を愛する豊かなセンスと新鮮なアイデアに支えられているため、つねに、立場をこえた多くの理解者と支持者を見出してこられた。真実を求める人に避けがたいいわれなき非難をこうむるときも、印象的な苦笑の表情からユーモアあふれる言葉を発して淡々と振る舞われることが多く、教授の周囲はいつも暖かな雰囲気に包まれていた。……」





執筆者紹介（執筆章順）

中村 剛治郎 ・横浜国立大学教授　序章
池 上　惇 ・京都大学教授　第Ⅰ部第 1 章
遠藤 宏一 ・日本福祉大学教授　第Ⅰ部第 2 章
山 田　明 ・名古屋市立女子短期大学助教授　第Ⅰ部第 3 章
坂本 忠次 ・岡山大学教授　第Ⅰ部第 4 章
重 森　暁 ・大阪経済大学教授　第Ⅰ部第 5 章
林　健 久 ・東京大学教授　第Ⅱ部第 1 章
小 林　昭 ・金沢大学教授　第Ⅱ部第 2 章
横 田　茂 ・関西大学教授　第Ⅱ部第 3 章，第Ⅳ部第 4 章（訳）
水口 憲人 ・大阪市立大学教授　第Ⅱ部第 4 章
淡路 剛久 ・立教大学教授　第Ⅲ部第 1 章
永 井　進 ・法政大学教授　第Ⅲ部第 2 章
塚谷 恒雄 ・京都大学教授　第Ⅲ部第 3 章
藤岡 貞彦 ・一橋大学教授　第Ⅲ部第 4 章
安藤 聡彦 ・中央大学講師　第Ⅲ部第 4 章
舟場 正富 ・広島大学教授　第Ⅳ部第 1 章
原田 正純 ・熊本大学助教授　第Ⅳ部第 2 章
アルマンド モンタナーリ ・ナポリ大学教授　第Ⅳ部第 3 章
宗田 好史 ・国際連合地域開発センター研究員　第Ⅳ部第 3 章（訳）
ウイリアム K. タブ ・ニューヨーク市立大学教授　第Ⅳ部第 4 章
保母 武彦 ・島根大学教授　第Ⅳ部第 5 章
加茂 利男 ・大阪市立大学教授　終章

本書は 22 人の研究者が序章、Ⅰ部からⅣ部、終章を執筆している。当時、名古屋市立女子短期大学助教授だった私も、第Ⅰ部第 3 章「産業構造の転換と社会資本」を執筆させてもらった。今読むと未熟な論文で恥ずかしいかぎりだが、締切に追われて、必死に書きあげたことふわふぬふわふふふふが忘れられない。論文さいごを紹介したい。

新自由主義のもとで社会資本が再編成されてくるなかで、「市場の欠陥」が拡大再生産されるなど、新たなひずみが社会問題としてもクローズアップされてきた。現実にも公私両部門で供給される「混合材」といった領域が広がってきており、やみくもに民営化・民活をすすめるのでなく、社会資本の供給のあり方を公共性とか共同性等の理論によってしめしていく必要があろう。ともあれ、転換期の社会資本論は産業構造転換にともなって、いくつかの新しい問題が提起されてきており、関連する領域の成果をふまえた理論化が求められていよう。

還暦、古希も過ぎてしまったが、宮本先生の業績から学び、奮闘努力していきたい。

（2021 年 8 月 24 日）